

令和7年度

2学年「ヒューマン基礎」授業報告

◎ 4月15日(火)

「オリエンテーションおよび進路実現について」

担当:本校教員

- ◇ヒューマン基礎とは
- ◇今年度実施の年間計画の確認と概要説明
- ◇自分を見つめ直してみよう!
- ◇お礼のことば、お礼状について

≪講義の様子≫



≪生徒の感想≫

私は人前で話すことが苦手なので、それを克服するために、コミュニケーション能力を身につけていきたいです。克服すれば面接でも堂々と話せると思うので、この1年間で克服したいです。生活探究では、保育検定取得のために積極的に取り組みたいです。総合ヒューマン類型では、自分の夢に関わることでなくても、保育に共通した福祉や医療、看護について講義を聞くことができるので、知識を深め、少しでも自分の将来の夢につなげていきたいと思えます。面接では、ニュースを聞かれることがあります。自分の将来に関するニュースを、日頃から興味を持って見ようと思いました。その他にも高校で頑張ったことを聞かれるので、部活動や勉強、委員会活動など、日頃から頑張ってお話できるように努力し続けようと思えます。総合ヒューマン類型でしか学べないことがたくさんあるので、講義でメモを取り、面接にも役立てるようにするため、自分の知識を深めていきたいです。

私は将来、患者さんの心に寄り添える看護師になりたいと考えています。そのために高校生活では先生方や先輩方、同級生、後輩などより多くの人と積極的に関わり、コミュニケーション能力を高めていきたいです。また、積極性や責任感を身につけるためにも委員会活動やボランティア活動に参加していきたいです。そして、ヒューマン基礎の授業では、看護分野だけでなく医療、教育、福祉の分野も積極的に学び、看護分野ではどのようにこの学びがつながるのかをしっかりと講義を受けていきたいです。ヒューマン基礎の中で、意見交換があった際には、自分の意見を伝えられるようにしたいです。このように、これからは将来に向けて何事にも一生懸命に取り組んでいきたいです。

私はこの1年間を通して、3年生になってから困らないように勉強する習慣を身につけること、進路実現に向けて、何事にも全力で取り組み、面接で活かせるようにすることを徹底します。まず勉強する習慣を身につけるために、最初は10分だけでもいいので毎日勉強机に向かいます。慣れてきたら時間を延ばしていき、毎日、最低でも1時間はやるという目標を立てて、コツコツ頑張っていきたいです。進路実現のために日々の生活を大切に、面接で活用できることを見つけていきたいです。英語検定や保育技術検定を受けたりして、必要な知識をたくさんつけていきたいです。3年生になって慌てて受験準備をするよりも、今から着実に知識をつけて、大学について調べたりしていきたいです。

私の将来の夢は看護師になることです。私の目指している看護師は、手話ができる看護師であるため、2年生の間に手話にたくさん触れ、日常会話ができる程度になりたいです。また、私の目指している大学の偏差値は50代後半であるため、確実に合格するためには、偏差値を上げなければなりません。そのため日々の小テストに合格したり、定期考査で点数を取れるように、平日では2時間以上、休日では5時間以上を目標に毎日、学習する習慣をつけたいと思えます。そしてヒューマン基礎では、今年から授業になるため、今まで以上に気を引き締めて取り組みたいです。これからヒューマン基礎や小テストなどが始まり、テスト勉強などで追われると思えますが、課題などの提出日はしっかりと守れるようにしたいです。

◎ 4月22日(火)

「子どものための看護について」

担当:大阪青山大学 看護学部 看護学科

学科長・教授 小島 賢子先生

◇子どものための看護 ①子供が入院しているところは ②子どもの入院生活を支える

◇子どもの力を信じる看護 子どもの対処能力 ◇ファシリテッドッグ アイビー

≪講義の様子≫



≪生徒の感想≫

私は将来、乳児院看護師になるという夢があるため、この講義で様々な気づきや学びがありました。看護職は人々の生活を支える必要不可欠な仕事で、人間にしかできない大変さや、やりがいを感じることができる仕事だと思いました。私も小さい頃、入退院を繰り返していました。友達と会うことが少なくなり、不安や孤独を感じることもありました。看護師さんや母が身体面だけでなく、精神面にも寄り添ってくれました。制限された空間の中でも病気と闘う子どもたちと一人一人に柔軟に対応する看護師さんの誠意を学ぶことができました。また、子ども憲章の「子どもの最善の利益を考える」では、病院自体にも工夫されていることが分かりました。子どもたちが楽しく遊べる場が用意されていたり、大きな音が苦手な子どものためにネコ型MRIが設置されており、子どもが怖がらないよう前もって体験するプレパレーションという方法が取り入れられています。ぬいぐるみや絵本を使用して病気の治療法を伝えたり、気を紛らわせるために優しく工夫された声掛けが行われていることを知りました。その子に合った関わり方をすることが大事だと知り、ひとりひとりの支えになることが、病気に立ち向かう子どもたちを守ることに繋がると考えました。

今回の講義で、特に印象に残ったのは、検査や手術時に子どもが不安にならないように気を紛らわせる工夫をすることです。例えば、実際に使う道具を触らせたり、事前に体験させたりすることで、子どもが状況を理解しやすく安心させられるということを知り、驚きました。また、ファシリテッドッグという存在も心に残りました。犬がそばにいてくれることで、子どもたちは「ひとりじゃない」と感じ、心の支えになると思いました。子どもたちの小さな不安や恐怖を和らげるために、看護師は一つ一つの行動に工夫しているのだと思いました。私は講義を受けて「病気の子どもたちのために何かしてあげたい」という気持ちがより強くなりました。私は将来、看護の道に進みたいと考えています。これまで以上に子どもの気持ちに寄り添える看護がしたいと思うようになりました。講義を通して、看護はただ治療の手助けをするだけでなく、子どもたちの心に寄り添うことが大切だと感じました。子どもの笑顔を守れるような看護師を目指します。

今回の講義を通して、子どもの最善の利益を考えることが大切ということを知りました。一人で入院できない子どもには親が付き添って入院できたり、手術や検査の事前体験や、情報を提供することで心の準備をさせたりするなど、子どもが安心して治療できるようにいろいろな工夫がされています。この話を聞き、子どもの権利が守られて治療されていることを実感しました。病院にサンタが来ることで子どもたちが笑顔になり、呼吸器を使用している子どもの心拍数が上昇するなど、喜びの反応が見られたという話が特に印象に残りました。非日常の体験を通じて、子ども達が普段の生活や自分らしさを取り戻すことができ、心と体に配慮した治療は、子どもたちの未来につながる大切な支援であると実感しました。私が職業体験をした際に、保育園に行くのを嫌がる子どもを見ました。将来、保育士になる夢を叶えたときには、今回学んだ工夫や子どもの頑張りをしっかり褒めるなど、保育園が楽しい場所だと感じてもらえる保育士を目指します。

◎ 5月13日(火)

「介護予防 ～福祉レクリエーション～」

担当：履正社国際医療スポーツ専門学校

逢阪 幸右先生

◇高齢化率、健康寿命、健康を支える職業、福祉レクリエーションの目的・注意点、

◇アイスブレイキング:①導入段階(1対1) ②交流段階(小グループ) ③発展段階(小グループ間)

≪講義の様子≫



≪生徒の感想≫

介護と福祉、スポーツは、どれも密接な関係があることを知った。介護を必要とせず健康に過ごすために、スポーツ脳の活性化には、手指や口の動きなどを使ってできる対策や予防があると分かった。介護や医療に頼らないといけない場面のために福祉がある。この3点の繋がりには、少子高齢化が進む日本にとって、心強い支柱になっているように感じた。少子高齢化が進む原因の一つに、医療の技術の発達がある。多くの人が長生きできることや、高度な治療を受けられることなど、良いことしかないように思えたが、医療費の高騰なども引き起こされる。また、介護予防に関わる仕事の需要が高まっていることが分かった。例えば、捻挫や打撲を治療する柔道整復師や、基本動作能力の回復・維持する理学療法士など、生活の質の向上が目的であると知った。高齢者の方は小さな原因から怪我や病気になり、寝たきりに繋がってしまう。そうならないために福祉レクリエーションがあると知った。体験を通して難しく感じるものがあったが、楽しく活動することができた。高齢者の方も楽しく介護予防ができ、道具を必要としないものが多く、気軽に祖父母を誘えると思った。介護予防をしていると感じなくても活動できるので、自主的にしてくれそうだと感じた。

本時は、介護の福祉レクリエーションを初めて学習・体験しました。1年生の時に甲子園短期大学で介護の体験をしましたが、その時には「体が不自由な人に対する介護」を学びました。今回は、「介護を予防するためのレクリエーション」を学び、まずそういった介護予防の方法があることを初めて知り驚きました。日本人の健康寿命が延びたのは、医療の発達だけでなく、そのような介護予防の効果もあると考えました。私は将来、看護師を目指しています。看護師も介護をする立場になることがありますが、私が看護師になったら、介護予防のための会話や、手の動かしか方を実際に患者さんと共有したり、それをした上で患者さんの病気を治したりしたいです。また、私は祖母と一緒に暮らしているので、家族でも共有しつつ、家の中の危険な段差をなくしたり、身の周りのできる対策や予防をしたいと思います。口と手を動かすと脳が活性化すると知ったので、人とたくさん話してたくさん笑い、みんなで一緒に介護予防をしていきたいです。

介護を必要とせず健康でいることが大事ですが、具体的にどのようなことを行うのか今回の講義で知ることができました。私は介護予防と聞いて体を動かすことしか思い付きませんでした。人とコミュニケーションをとることも介護予防になると知り、大変興味深かったです。今回体験したアイスブレイキングは、楽しみながら体や脳を使うものでした。そして、これは段階を踏んで実施されるため、緊張がほぐれて、さらに楽しい、面白いという感情をほかの人と共有できることを嬉しく感じ、より笑顔が増えたように思います。私は、はじめは失敗や間違いを恐れ、上手く体を動かせなかったのですが、失敗をして笑いが起き、それすらも楽しむことができました。そのおかげで、気づいたら全力で活動している自分がいました。グループ活動では、みんなで息を合わせることが必要だったため、できた時の達成感を倍、感じられました。私は今回の講義で、アイスブレイキングという方法を知り、段階を踏まえることの大切さに気付きました。これは、勉強や人との関わりにも重要だと思うので、今後活用していきたいです。

◎ 5月27日(火)

「コミュニケーションと手話Ⅰ」

担当:伊丹市聴力障害者協会 久保 みどり先生

手話サークルにゆびの会 山内 滋子先生

◇聴力に障害が出る原因、聴力障害者のコミュニケーションの方法(筆談、空書、口話、手話、スマホ)

◇挨拶の手話表現 ◇指文字の表現・・・自分の名前を指文字で表現しよう

≪講義の様子≫



≪生徒の感想≫

「コミュニケーションと手話」について学び、特に聴覚障がいのある方との関わり方について理解を深めることができました。手話は単なる手段ではなく、言語であり、表情や身振りも含めた大切なコミュニケーションであることを学びました。また、聴覚障がいの原因には様々な要因があり、それぞれに応じた対応が求められることも印象に残りました。例えば、生まれつき耳が聞こえない「ろう者」と、途中から聞こえにくくなった方では、使う言語や必要な配慮が異なることを知り、その人に合った対応の大切さを実感しました。特に印象に残ったのは「補聴器をつけていても聞こえるとは限らない」という点です。見た目だけで判断せず、相手の状況をよく理解しようとする姿勢が重要だと感じました。聴覚障がい者には「伝音性難聴」と「感音性難聴」があることを学びました。伝音性難聴は外耳や内耳の異常によって音がうまく伝わらない状態で、比較的改善が可能なこともある一方で、感音性難聴は内耳や神経の障害が原因で音がうまく感じ取れなくなる状態で補聴器をつけても聞こえないことが分かりました。遺伝や病気だけでなく、ストレスなども関係して聞こえなくなることがあると知り、驚きました。今後は手話だけでなく、表情を読む力、身振りなどを含めた多様なコミュニケーション手段を意識し、一人一人のニーズに応じた柔軟な対応ができるように心掛けていきたいです。

私は今回の講義を聞いて、手話が「目で見える言葉」だということを知りました。手話は手だけで表現するものだと思っていましたが、実際には空書や身振り、表情など様々なコミュニケーション手段があることに驚きました。その人のニーズや状況に応じて、組み合わせてコミュニケーションをとることの大切さを学ぶことができました。また口語では、口の動きから言葉を読み取るのは簡単だと思っていましたが、実際には似ている口の動きも多く、誤解がうまれてしまうこともあると知り、手話をできるだけ覚えて使っていくことの大切さを実感しました。自分の名前の手話を教えてもらい、手話はいくつかの種類があり、人によって使う手話が違うことも学びました。また、耳の聞こえない人には優しく肩を叩いて注意をひくとよいことや、光や振動で知らせる方法があることも学びました。これから耳の聞こえない人に出会ったときには、今回の講義で学んだ挨拶や名前の手話を使って対話したり、困っていたら助けたりしたいと思いました。

今回の講義を受けて、聴覚障がいを持っている方のコミュニケーション方法がたくさんあることや、聴覚障がいの中にも種類があり、原因や会話方法は異なることを学びました。コミュニケーション方法には、口話がありますが、母音と同じ言葉など口形が似ている言葉は分かりづらいため、身振り手振りで表現したり手話を使ったりする方が通じやすいと思いました。他にもスマホや筆談、空書などがあります。一人一人の状況に合わせてコミュニケーションを取ることが一番大切だと学びました。また、聴覚障がい者の方は、車のクラクションに気づくことが難しかったり、突然声を掛けられると驚いてしまったり、日常生活でも困ることがたくさんあることを知ったので、今回学んだことを生かして配慮して接したいです。

◎ 6月3日(火)

「コミュニケーションと手話Ⅱ」

担当:伊丹市聴力障害者協会 久保 みどり先生

手話サークルこゆびの会 山内 滋子先生

◇挨拶の復習

◇誕生日、家族、数字を表す手話

◇音について

◇難聴者が日常生活で困ることと工夫について

≪ 講義の様子 ≫



≪ 生徒の感想 ≫

今回の講義を受けて、コミュニケーションを取るためには手話だけでなく身振りでも伝えることができることを学びました。手話は一定のルールや文法がありますが、身振りは表現が人によって異なります。実際に車を身振りで伝えた際はスムーズに伝えることができましたが、車が渋滞していることを伝えるのは難しかったです。身振りで伝えることができなかつたときは、手話で伝えることができればコミュニケーションを取ることができるので、少しずつでも覚えていこうと思います。また、聴覚障がい者の方は日常生活を送るために、ドアベル、アラートマスター親機、ペットシェイカーなど、光るもので気づくようにしていることを学びました。一番印象に残ったのは、「諦めない」という言葉です。相手の思いを受け取ろうとする姿勢が何より大切で、伝わらないことがあつたとしても諦めずに伝えようとする気持ちがあれば、表現の方法は違つても、人と人は分かりあえるのだと感じました。

私が今回の講義で学んだことは、手話が単なる身振りではなく、しっかりとした「言語」であるということです。自分の名前や趣味を手話で表現した際、手話には決まりが存在することを学びました。久保先生に自己紹介をしたときは緊張しましたが、伝わつた時の嬉しさは大きく、自分の思いを伝える手段としての手話の力を実感しました。また、身振りと手話の違いは、身振りは状況に応じて個人差が出てしまう動作であるのに対して、手話は一定のルールや文法がある「言語」であるという点がとても印象的でした。また、各国で手話に違いがあるのは宗教的な問題を避けるためではないかと思いました。この講座を通じて、手話をただ覚えるだけでなく、「諦めないで伝えようとする気持ち」を持って表現することが何より大切だと感じました。今後も相手を思いやる気持ちを大切に、必要に応じて手話を使おうと思います。

2回目の手話の講義では、身振りと手話の違いについて学びました。これまで私は、手話も身振りの一種であると思っていたのですが、手話にはルールや文法があり、会話に必要な十分な語彙が備わっているということを知り、とても驚きました。また手話は世界共通ではないということも新しい学びでした。英語、中国語などと同じように、手話にも国や地域によって違いがあるということは、聴覚障害者同士のコミュニケーションにも工夫が必要であると知り、改めて考えるきっかけになりました。さらに、聴覚障害者の方が使っている様々な工夫された道具についても知ることができました。例えば、目覚まし時計はスマートフォンのバイブレーション機能や、枕の下で振動して起こしてくれる機械、また誰かが家に来たときに光が点滅して教えてくれる機械など、音が聞こえない中でも生活しやすいように工夫されていることに感心しました。これからの社会で、耳の聞こえない人が身近に増えてくると思います。例えば、仕事で大事な話をしているときには聴覚障害者の方々に伝えるなど、周りの私たちが少しでも気を配り「伝える努力」をすることが大切だと思います。2回の講義を通して、私は手話をもっとしっかりと学び、聴覚障害者の方々に安心してもらえる存在になりたいという気持ちが強くなりました。自分にできることから少しずつ始めて、思いやりのある行動を実践していきたいです。

◎ 6月10日(火)

「心はかかわりの中で発達する」

担当: 関西学院短期大学

竹内 伸宜先生

◇乳幼児の心理学

ものやひととかわるなかでおこる行動や心の発達

◇「反射」から「意図」を持ち「遊ぶ」まで → 見える世界と触れる世界の協応 → 他者とのやりとり

≪講義の様子≫



≪生徒の感想≫

私は今回の講義を聞いて、赤ちゃんは環境に合わせて自分を変えるということを知りました。自分で物を変えることができなければ、泣くことで周囲に伝えようとする。この姿から、人が生まれたときから他者と関わりながら成長していく存在であることを実感しました。乳幼児には保育者の存在が大事な役割を持っていることを知りました。ぬいぐるみや絵本を通して、保育者が子どもたちに「今ここはない世界」を伝えることがすごいことだと思いました。そういう経験の積み重ねが子どもたちの想像力を育て、他者と経験を分かち合う力を身につけていくのだと知り、保育者の役割の大切さを改めて感じました。さらに8か月までの赤ちゃんは目の前から物が見えなくなると「この世からなくなった」と思い込むという発達の特徴も興味深かったです。講義中に見た動画では、物が見えなくなるとすぐに他のものに興味を移す赤ちゃんの姿が映されていて、その行動が興味深いと感じました。私は将来、保育士になることを目指しています。子どもの行動は思いもよらないことが多いですが、しっかり観察して、子どもの心理などを知りたいと思いました。

私が今回の講座で学んだことは、生まれたばかりの赤ちゃんにもすでに他者を感じ取り、共鳴し共感する働きが始まっているということです。私はこれまで、新生児はまだ感情や思考が未発達だと考えていました。実際には表情や声、養育者との肌の触れ合いなどを通して周囲とつながりを得ていることを知り、とても驚きました。特に母親の表情や抱っこなどのやりとりが赤ちゃんの行動を制御するためだと知り、感情の形成に大きく影響することを学びました。また、対象物の永続性を理解できない時期でも、相手が普段から関わりの多い養育者であれば、感覚で身体が覚えていることがあると知り、赤ちゃんにとって触れ合いは相手の存在を認識する大切なコミュニケーションの一つであると感じました。この学びを通して、相手が小さな赤ちゃんであっても、思いやりをもって関わることの大切さを改めて実感しました。今後、子どもと関わる場面でも、心の発達を意識して丁寧に向き合っていきたいと思います。

今回の講義では「心はかかわりの中で発達する」というテーマについて学び、普段何気なく見ている赤ちゃんの行動にもたくさんの意味があることを知って驚きました。例えば、赤ちゃんは目の前にあった物が隠れると、他の物に興味を示すのは、「モノの永続性」という概念が育っていないからだそうです。そうした一つ一つの感覚や認知が他者とのやり取りの中で身についていくというのが印象的でした。また、赤ちゃんが親の顔の動きや表情を真似するという話も興味深かったです。そうした模倣の積み重ねによって、言葉や感情の表現、行動のパターンなどが身についていくという話を聞いて、「だから子どもは親に似る」と言われるのかもしれないと思いました。最後に、なぜ自分自身も赤ちゃんの時期を過ごしたのに、その頃の記憶がまったく残っていないのか、とても不思議に感じました。それは積み重ねが今の自分につながっているものだと考えると、人の心の発達はとても奥深いものだと感じました。

◎ 6月17日(火)

「赤ちゃん先生 ～育児体験～」

担当: NPO 法人「ママの働き方応援隊」大阪北摂校

田中尚子先生, ママ講師と赤ちゃん先生7組

◇託児体験

◇ママ講師の育児とキャリアデザイン講話

◇グループでの感想シェア

≪講義の様子≫



≪生徒の感想≫

今回の赤ちゃん先生の授業で、実際に赤ちゃんとお母さんに来ていただき、子育ての現実の日々の思いについて直接お話を聞くことができました。赤ちゃんを目の前にして感じたのは、小さな体で一生懸命表現しようとする姿がとても尊く、赤ちゃんと向き合うお母さんの姿に深い愛情と強さを感じたことです。お母さんが話してくださった中で印象に残っていることは「子どもと同じ目線で物事を見ると子どもの気持ちを理解しやすくなる」という言葉です。言葉をまだ上手く使えない赤ちゃんの気持ちをくみ取りながら、日々、試行錯誤して向き合っている様子から、子育ては肉体的にも精神的にも大きなエネルギーを必要とすることを実感しました。また、育児はお母さん一人では担いきれないことも多く、家族や周囲の理解と支えがとても大切であることも学びました。今回の体験を通して、私は命の大切さとともに、人と人とのつながりや思いやりの重要性を改めて実感しました。今後、日常生活の中でも相手の立場に立って考える姿勢を大切にしていきたいです。

今回の講座を受け、命の重みや子育ての大変さについて深く考えることができました。「子育てで一番大変だったのは？」という質問に「時期によって違う」という答えが返ってきたことが印象に残りました。立っていない時期はお風呂が特に大変だったり、自分のことを後回しにして子ども中心に動く大変さを知りました。また、子育ては親二人でも大変で、パートナーと協力することの大切さも知りました。赤ちゃんのことだけでなく、家事や仕事もお互いに支え合う必要があることを学びました。子どもができて「健康的になった」という話も心に残りました。子どものために食事や生活リズムを整えることで、自分自身も健康になれると知りました。今の私にできることは、赤ちゃんやお母さんに優しい気持ちで接することだと感じました。電車や道で泣いていても、あたたかく見守れる人でいたいと強く思いました。

今回、0、1、2歳の赤ちゃんやそのお母さんと関わることで、子育ての大変さ、楽しさや、関わるうえで大切なことをたくさん知ることができました。特に印象に残ったのは、1歳5か月の子どもが私は思っていたよりもできることが多かったことです。自分で歩いたり、「ちょうだい」と声を掛けるとモノを渡してくれたり、「ありがとう」とモノを返すとニコニコと笑ってくれたりする姿がとても可愛らしくて、短いやり取りの中でも子どもとの信頼関係や心の通い合いを感じることができました。イヤイヤ期は3歳頃だと思っていたので、2歳8か月ではほとんど終わりかけで、何がどうイヤだったのか文で話せることに驚きました。その子とは緊張や人見知りです話すことはできませんでしたが、心の中には思いがあると感じました。弟が主に関わっている様子を見て、寂しい気持ちになっていたかもしれないと思いました。名前を呼ぶと振り向いてくれて、とても嬉しかったです。子どもの気持ちに寄り添うことの大切さを感じました。赤ちゃんは親が言ったことは覚えていて、「わがまま言ったらダメでしょ」や「悪いことをしたらごめんなさい」などの言葉も自然と身についていくのだと感じました。だからこそ大人の発する言葉はとても重要で、赤ちゃんは思っている以上に大人の姿をよく見て、言葉を聞いているのだと思いました。11か月で眠たくて泣いている姿やハイハイしている姿、親の話もたくさん聴いて、子どもの成長はそれぞれであるということを知りました。

◎ 6月24日(火)

「分野別研究レポートを作成しよう」

担当:本校教員

総合ヒューマン類型の生徒が志望する「看護」「医療」「保育」「福祉」分野について、各自の進路に応じたテーマを設定し、それらについて調べ、レポートにしてまとめる。

【目標】

自分が志望する分野（職業・学部・学科等）について調べ、進路実現に役立てる。  
見やすく、分かりやすい、内容の充実したレポートを作成する。

【要項】

(1) 将来、就職・進学を希望する分野を下記から一つ選ぶ。

ア 看護      イ 医療      ウ 教育・保育      エ 福祉      オ その他

(2) 「分野別研究レポート」に含める項目（★は必ず）

1. 仕事の内容
2. その職業に就くには、必要な資格。適性。
3. その分野を学べる大学・短大・専門学校。
4. 進路先で学べること。主な専門科目とその内容など。取得可能な資格。

★5. 感想

★6. 参考文献（文献名、Web サイト名、URL など）

【作成上のポイント】

(1) レポート作成にあたっての心構え

- ① 対象者は「異なる進路をめざしている高校2年生」
- ② 興味関心を抱く情報を織り込み、読みやすい構成に工夫する。  
(適度な大きさの文字と目立つ見出し、効果的な記事の並べ方、など)
- ③ 丁寧に仕上げる。
- ④ Web サイトの使用は認めるが、ウィキペディア等信憑性に欠けるものは使用しない。
- ⑤ 情報を羅列するのではなく、その中から有用なものをピックアップしてまとめる。
- ⑥ コピー禁止。写しただけにならないように、自分の言葉で内容の濃いものを作成する。

(2) レポート作成の原則

- ① A4判プリント（縦向き）。枠内にまとめること。
- ② レポートの枠内の一番上に必ずタイトル・テーマを入れる。
- ③ 文字はボールペン書き・手書き。色鉛筆・カラーペンなどで明るく着色する。
- ④ 適切な図版を挿入する。（読み手の理解を助け、構成のアクセントにもなる。）
- ⑤ 引用・参考にした Web サイト名、URL や文献名を必ず記入すること。

◎ 7月18日(金)

「心肺蘇生法(AED)講習会」

担当:伊丹市池尻消防署員

◇応急手当の重要性

◇救命措置(心肺蘇生・AED)の流れ、実施訓練

≪講習会の様子≫



≪生徒の感想≫

私は今まで AED を使ったことがなかったので、使用する手順や操作の仕方など知らないことが多い状態でした。本時の講習を通してそれらを学ぶとともに、AED の重要性を学びました。AED の処置をするのとしないのとでは救命率が全く異なっており、AED を使用することがその人の社会復帰やこれからの人生を決めることになると知りました。実際に AED の訓練をしてみると、AED を使用する前にも、周囲の確認や反応の確認、呼吸があるかどうかを確認することも重要な判断の1つであり、それを頭に入れておくことが大切だと思いました。今はまだ何の資格もなく、医療の知識に富んでいるわけではないですが、そんな私でも誰かの命を助けられるということを知り、嬉しかったです。訓練用の AED を使用したときに、機械の音声分かりやすく指示してくれたため、簡単に操作できました。人を助けることを諦めず、とにかく早い決断をしようと思いました。

今回は心肺蘇生法や AED の使い方について学ぶことができました。まず、処置の中にも種類があり、突然の怪我や病気に対し、家庭や職場でできる手当てのことを応急処置といい、突然、心臓や呼吸が止まってしまった場合、そばに居合わせた人ができる手当てのことを救命処置ということが分かりました。また、居合わせた人が救命処置をした場合と、救急車が来るまで何もしなかった場合とで、命が助かる可能性が大きく変わるということに驚きました。そのため、誰もが胸骨圧迫、AED の使い方を知る必要があると思いました。実際にモデルを使って体験して思ったことは、胸骨圧迫が思っていた以上に大変だということです。胸骨圧迫は倒れている人にとっての心臓の代わりです。一度でも止めてしまうと意味がなくなってしまいます。今回の講義を通して、もし倒れた人を発見した場合、周りの人達(バイスタンダー)と協力し、冷静さを失わず、行動することを心掛けたいと思いました。また、AED のある場所も調べようと思います。

今回、心肺蘇生法の講習会を受講して最も強く感じたのは「知識だけでは人の命を救えない」ということです。頭で理解しているつもりでも、実際の場面を想定すると戸惑いや不安を生じ、いざという時に行動する難しさを実感しました。そのため、正しい知識を繰り返し学び、体で覚えておくことの大切さを改めて認識しました。また、人の命に関わる行動には勇気が必要であることにも気づきました。もし目の前で誰かが倒れたら、ためらわずに動けるだろうか、と何度も自分自身に問いかけました。失敗を恐れる気持ちは当然ありますが、何もしなければ命を救えないという現実を思うと、まずは一歩を踏み出す決断が重要なのだと強く感じました。今回の講習会を通じて、私は「知っている」から「できる」へと意識を変えることができました。今後も学んだことを忘れず、常に冷静な判断と行動ができる自分でありたいと思います。そして、命を守る行動ができるように、日常の中で備える姿勢を大切にしていきたいと思います。

今回の講座では AED の使い方や心肺蘇生法の重要性を学びました。胸骨圧迫では、人の身体は想像以上に深く、しっかりと押さなければ効果が出ないことを実感し、救急車が到着するまで続けるには体力が必要だと感じました。講座の途中で「大切な人が倒れたと思って」と先生から言われ、母の姿を思い浮かべながら真剣に取り組みました。その中で、助けたいという思いが強すぎると周囲が見えなくなり、二次被害を招く危険があることを学び、冷静さを保つ重要性を学びました。また AED の使用が遅れると社会復帰率が大きく低下すると知り、大切な命を守るためには、正確さと迅速な対応が必要であることを痛感しました。さらに、知識だけでなく、日頃からの心構えや備えが実際の救命活動で大きな差を生むことも強く感じました。

◎ 9月2日(火)

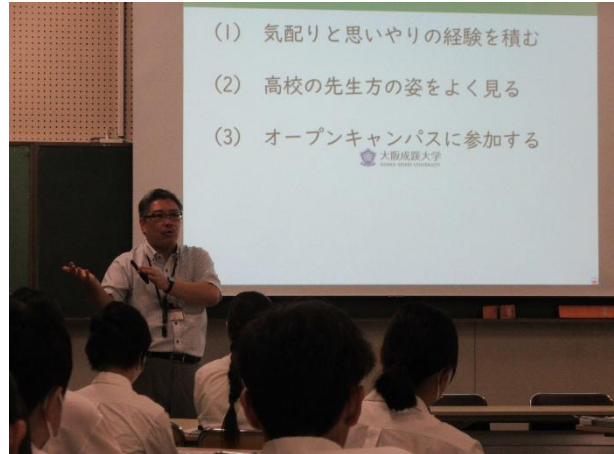
「子どもが楽しく、かつ、深く学ぶ授業とは」

担当:大阪成蹊大学 教育学部

丸野 亨先生

◇ふち模擬授業(小学校社会科) ◇授業者の工夫を見抜こう! ◇教育学部の学び

≪講義の様子≫



≪生徒の感想≫

今回の講義を通して、子どもにとって「楽しい授業」と「深い学び」が別々のものではなく、むしろ結びついていることに気づきました。これまで私は、楽しさを重視すると内容が浅くなり、深い学びを追求すると子どもにとって難しくなってしまうのではないかと考えていました。しかし実際には、子どもが自ら夢中になって学ぶときこそ、知識や体験が深く身につくのだと理解しました。また、子どもにとって意味のある問いや課題を提示することで、自然に探究心が芽生え、自ら考えたり調べたりする姿勢につながると感じました。教師が一方向的に知識を与えるのではなく、子どもが主体的に関われる工夫が必要だと学びました。さらに、授業の中では「遊び心」や「体験」を取り入れることの重要性も理解しました。遊びや活動を通じて学んだことは記憶に残りやすく、同時に考える力や協力する姿勢を育てることもつながります。子どもにとっての学びは単なる知識の習得ではなく、人との関わりや経験の積み重ねの中で広がるのだと思いました。私がこれから子どもに関わる場面に訪れたら「楽しく深い学び」を得られるように意識したいと思います。

今回の講義では、「子どもが楽しく、かつ深く学ぶための授業とは」について学びました。まず私は授業に入る前の活動に工夫を感じました。生徒が知っている身近なものを例に問い掛けから、個人の考え方に違いがあることに気づきました。この活動によって生徒の緊張をほぐし、お互いに学びを深めることができると思いました。次に航空写真を用いた問いかけでは、想像力を高めるために多数の選択肢を作り、いろいろな角度から物事を考えるように工夫されていました。また、自分の考えの理由を他者と共有することによって、より学びが広がっていくと実感しました。「社会科は記憶力」という決めつけではなく、どんな物事に対して、自分から積極的に学びに行く意識をもつことが大切だと分かりました。そして、教育においては、相手に合わせた授業スタイルを見つけ、内容や教材、方法、流れなどを工夫した指導法を身につけることが教育者に求められていると感じました。授業内容を聞いて理解するだけでなく、実践したり、周りとの協力して結論を導き出すことをこれから心掛けていきたいと思いました。また、相手の立場になって物事を考えられるように視野を広くもつことも意識していきたいと思いました。

私は今回の講義を受講して、先生が一方向的に話すだけでなく、生徒が考えることの大切さを実感しました。授業の中では、まず一人で考えてから、次に友達と意見を交換するという流れがありました。その過程を通して、人に自分の意見を伝えたり、人の考えを聞いたりすることで、自分にはなかった視点に気づくことができ、考えが広がっていく体験をしました。自分だけでは思いつかなかった新しい考えが生まれることもあり、学びは一人だけで終わるのではなく、周りの人との関わりの中で深まっていくのだと実感しました。また、先生の授業の工夫として、生徒の発言を決して否定せず受けとめていたこと、自分たちの知っている場所を使って問題を出していたこと、さらに話し方に抑揚をつけて生徒の興味を引いていたことが印象的でした。私は将来、保育士になることを目指しています。子どもたちが安心して自分の考えを言える環境をつくること、そして自分の話に耳を傾けてもらえるような工夫をしたいと思います。講義で学んだ工夫を将来に活かしていきたいです。

◎ 9月9日(火)

「作業療法士の仕事とは」

担当: 藍野大学 医療保健学部 作業療法学科

尾藤 祥子先生

◇作業療法士(OT)の拡大する活躍の場、作業療法士は消えない職業、医療職で人の役に立つ

◇感覚の捉え方の違い ◇「その人らしい生活」を心と身体の内面からサポートできる専門家

《講義の様子》



《生徒の感想》

作業療法士とは「その人らしい生活」を心と身体の内面からサポートする専門職であることを学びました。医療職という印象が強かったのですが、保育園や小学校など様々な場で人の役に立つ仕事であることを知り、視野が広がりました。作業療法は一人一人の悩みや困りごとの原因が違うため、その人に合ったオーダーメイドのアプローチが必要であり、その大切さを実感しました。将来、保育士になったときには、子ども一人一人の感覚の違いを理解し、もし悩んでいる子どもがいれば、その子の気持ちに寄り添い、一緒に考えたいと思いました。「気づいてあげること」がアプローチの第一歩になることを知り、子どもをよく観察することの大切さを改めて感じました。遊びの中に眼球運動やハンドゲームなど、感覚を育てる工夫を取り入れていきたいと思います。そして日々の保育の中で、子どもたちを楽しく支援していけたらと思いました。

作業療法士は心と体のリハビリテーションを行う役割として、医療や介護、教育など様々な場所で活躍していると分かりました。異なる世代の方々と関わる場面が多く、その人に合ったオーダーメイドを考え、アプローチの仕方もそれぞれ変えていく必要があるため「人」にしかできない重要な仕事だと感じました。次に、保育や学校で働く作業療法士は、子どもたちの生活面や学習面での課題を見つけ、先生から相談を受けて改善するために様々なトレーニングを考えていると知りました。固有感覚や前提感覚など、感覚の捉え方によって、過敏に反応してしまう人や鈍感な人がいるため、授業前に体操を行ったり、ポジショニングを整える道具などを活用しながら少しずつ子どもたちの成長につなげているのだと思いました。そして、脳の抑制システムを確認するためのトレーニングを実際に体験しました。成長するにつれて知識が豊富になるため、敏感に反応してしまうのだと感じました。私は将来、人と関わる仕事に就きたいと考えているので、高校生のうちから洞察力を身につけ、その人に合った治療の仕方を見つけられる人になりたいです。

作業療法士の仕事のイメージを具体的にもつことができました。講義の中で特に印象に残っているのは、人によって感覚が違うということでした。例えば同じ刺激を受けても心地よいと感じる人もいれば、不快に感じてしまう人もいて、その違いによって人との関わり方が難しくなってしまふことがあると学びました。そのため相手の感覚を理解しようとする姿勢を持つことがとても大切であり、そこに寄り添う姿勢が信頼関係をつくる第一歩になるのだと感じました。また、作業療法士は「その人らしい生活」を支える専門職であり、心と身体の内面からサポートできる点に大きな魅力を感じました。単にリハビリを行うだけでなく、その人の生活全体を見て支援することが求められるため、広い視野で物事を捉える力が必要だと感じました。さらに医療や福祉など様々な場所で活躍できる仕事であるため、多くの人の役に立つことができ、その分、やりがいも大きいと感じました。今回の講義を通して、自分が将来どのような職業に就いたとしても、人との関わりの中で感覚の違いにすれ違いが起こることは避けられないと感じました。だからこそ、その違いを理解しようとする心を忘れず、相手を尊重し、寄り添うことのできる人間になりたいと思いました。また、作業療法士の考え方や姿勢は、日常においても大切にしていけるべきだと感じました。今後の自分の行動にしっかりと活かしていきたいです。

◎ 9月16日(火)

「栄養管理が患者の未来を変える」

担当:大阪樟蔭女子大学 健康栄養学部

井尻 吉信先生

◇栄養食事指導について

◇NST(栄養サポートチーム)

◇先輩管理栄養士からのメッセージ

≪講義の様子≫



≪生徒の感想≫

今回の講義で管理栄養士は、患者の未来を変えると知りました。今まで管理栄養士という職業は、「学校の給食を考える人」というイメージでした。ですが実際は仕事の幅が広く、深く、患者や相手に合わせていろいろな角度からサポートできる職業だと知りました。講義の中の動画で、2か月間、口から食事を取っていない患者さんに点滴に頼らず、ゼリー状にして食欲を湧かすなど、食事をただ与えるのではなく、患者さんがきちんと食べられるように工夫したり、心のケアもしたりと栄養療法はすべての医療の基礎になっていることを実感しました。そのため、相手を知るために食生活を聞いて、患者さんの体を実際に触って体の筋肉の状態を確認することで、相手に寄り添うことができると学びました。そして講師の先生がおっしゃっていた「管理栄養士≒ソムリエ」という言葉が印象に残っています。一人一人の体調や好みに合わせて最善の食事をサポートする、「食べること」で人を支えるプロだと気づきました。ただ、栄養を届けるのではなく、「その人が本当に必要としているもの」を見極める力が必要だと感じました。

今回の講義では「栄養管理が患者の未来を変える」について学びました。管理栄養士は「食事を通して人を笑顔にする」職業として幅広く活躍していることが分かりました。主に栄養食事指導と栄養管理を行っており、食事指導の際には相手のことを知り、食事の量を無理に変えたりせずに、調理の仕方を変えるといった栄養アセスメントを行い、ケアを立案することが大切だと思いました。栄養管理では、患者さんの栄養状態を確認し、その人に合わせた処置を行うことが重要だということを知りました。栄養を摂取することが難しい人は、少量で高エネルギーが得られる食事をし、口から食事ができない人は経鼻チューブなどを使って、口以外から栄養を摂るといった様々な方法が実施されていることがわかりました。次に動画を通して NST の必要性を感じました。口から食事を取ることによって免疫力が高まるため、管理栄養士が患者と向き合い、医師や理学療法士などと連携しながらサポートすることが患者の人生を救う一つの方法だと知りました。口から栄養を摂ることで食欲が増す傾向があり、筋肉がつくのでリハビリにも活かせるため、様々な医療の基礎として捉えられています。その人の生き方や考え方に合わせて患者さんの人生に寄り添い「想い」を受け止められる人になることを目標に、自分と向き合っていきたいです。

今回の講義で、管理栄養士という職業の偉大さを知ることができました。管理栄養士は患者の状態を見て、食事量や献立を決めるだけでなく、患者と実際に話をする中で、どのような食事をしていくのがよいかを相談しながら決めていき、その人に合ったアドバイスをしていると聞き、人と向き合う職業だと思いました。看護師や医師とは違った視点から患者さんと向き合っているため、私はとても新鮮な気持ちで講義を聞くことができました。「食事」という普段、私たちが何気なく行っている行為1つで、患者さんの状態や未来が大きく変わることに、笑顔が増えていく様子を見て、人を笑顔にできる仕事はとても魅力的だと思いましたし、「食事」という行為の重要性を改めて実感しました。最初に「栄養管理が患者の未来を変える」という言葉を聞いたときは、どういう意味だろうと思いましたが、先生のご説明や、実際に管理栄養士による食事のおかげで最初はともしんどそうだった患者さんが、徐々に元気を取り戻し、笑顔で感謝を述べている映像を見て、とても温かい気持ちになるとともに、最初の言葉の意味が理解できた気がして嬉しかったです。

◎ 10月7日(火)

「医療事務者はチーム医療の 重要な一員」

～窓口受付だけじゃない医療事務の仕事～

担当: 大手前短期大学 医療事務総合学科

小椋 千里先生

◇医療事務の仕事とは

◇医師事務作業補助者とは

◇チーム医療について

《講義の様子》



《生徒の感想》

医療事務とはチーム医療に欠かせない存在であることを知り、医療事務の仕事は受付業務だけではなく、診療報酬の請求や会計処理など、幅広い知識と正確さが求められる職種であると理解しました。医療事務の方々は、医師や看護師が診療に集中できるように支えており、医療現場にとって大切な役割を担っているのだと実感しました。また、電子カルテの入力や診断書、紹介状などを作成して医師の負担を減らす「医師事務作業補助者」の仕事について学びました。医師の事務的負担を軽減することで、より質の高い医療提供につながっていることに感心しました。さらに、診療内容や経過を整理して記録する際には「SOAP」という形式を用いて、どの医療職の方が見ても内容をすぐに理解できるように工夫されており、情報共有の重要性を強く認識しました。将来、看護師として働く際には、医療事務の方々をはじめ、さまざまな職種の方と協力しながら、患者さんに安心と信頼を届けられる医療を提供できるように努力していきたいです。

今回の講義では、医療事務の仕事について学びました。医療事務は様々な医療現場で活躍し、現在では医師事務作業補助者という医師の指示に基づいてサポートを行う専門職が増えていることが分かりました。医師事務作業補助者は、主にカルテを作成し、医師と補助者が患者の情報を記録し、管理していることが分かりました。また、カルテの作成だけでなく、薬の処方箋や診断書、紹介状などの各種文書の作成補助も行っており、コロナが流行っている時期では、感染症サーベイランスの業務を通して、対策していることが分かりました。次に電子カルテについて学びました。電子カルテには「SOAP」という4つの項目があり、Sは主観的情報として患者の訴えを表し、Oは客観的情報として医師の診察を表しており、AとPは、SとOから得られた情報に基づき、評価して医療法を考えるとといった患者に寄り添った過程が詳しく記録されています。また、部位選択から図式的に表すシェーマを活用し、患者の症状を医師や看護師に共有できるため、カルテの重要性に気づくことができました。医療事務者は、医師と患者のつなぎ役として深く関わっていることを知りました。

今回の講義で、医療事務の仕事が単なる事務作業ではなく、病院の経営と医療を支える専門職だと強く認識しました。特に正確さが必要とされるレセプト（診療報酬）業務が病院経営の基盤であり、高い専門性と責任感が求められることを感じました。また、医師事務作業補助者は、医療の質を高めるチーム医療の一員としての役割にも大きな魅力を感じました。これらを通して、私は医療事務には2つのことが求められると思いました。1つ目は専門性の知識です。正確性が求められるレセプト業務や迅速さが求められるカルテ管理では質の高い事務処理で病院の基盤を支えることが必要だと思います。2つ目は、あたたかいコミュニケーションです。不安な気持ちで病院に来る患者と最初にコミュニケーションを取るからです。「病院の顔」と言われる程大切な役割だと実感しました。知識や技術だけでなく、あたたかいコミュニケーションも大事な、人と関わる素敵な仕事だと思います。

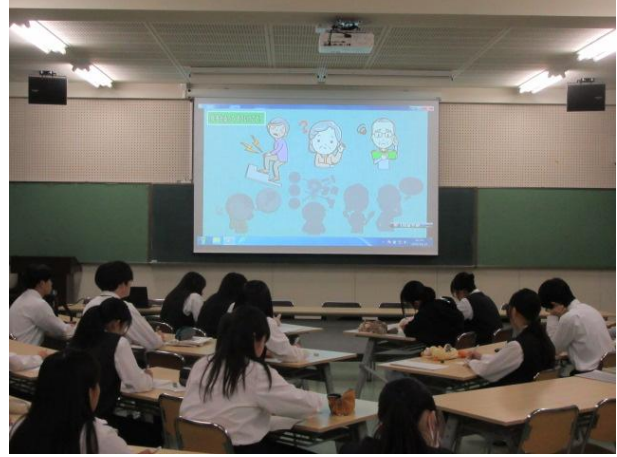
◎ 10月14日(火)

「訪問介護・訪問看護ってどんな仕事？」(DVD 学習)

担当:本校職員

◇11月25日の講座の事前学習(DVD 学習とアンケートの記入)

《講義の様子》



《DVD 視聴》

- ① 年をとるってどういうこと？
- ② 訪問介護ってどんな仕事？
- ③ 訪問看護ってどんな仕事？
- ④ 広がる可能性

《事前アンケート》

- ① DVD 研修を見る前に、介護や看護に対してどんなイメージがありますか？
- ② DVD 研修を見て、理解したことはありますか？
- ③ DVD 研修を見て、質問してみたいこと、わからないこと、知りたいことはありますか？
- ④ その他、実際の講義の際に、聞いてみたいこと、学びたいことは何ですか？

◎ 10月28日(火)

「認知症サポーター養成講座」

担当:花里・昆陽里 地域包括支援センター

社会福祉法人翠松会 伸幸苑キャラバンメイト

岡本 美也子先生、他

◇認知症サポーター養成講座(認知症とは、症状、認知症の人の気持ち・接し方、家族の気持ち)

◇認知症患者への対応等の個人ワークとグループワーク・発表

≪講義の様子≫



≪生徒の感想≫

今回の講義では、認知症サポーターについて学びました。私の母が介護士ということもあり、介護職についてはある程度知っていると思っていましたが、今回の講義で認知症の人の気持ち、その家族の気持ち、接し方を深く学びました。認知症は誰もがなる可能性があること知り、少し怖くなりました。自分が認知症だと知ると、とても不安で、自信喪失や悔しさ、疎外感を感じることを知りました。そんな認知症の人への接し方として、「3つの“ない”」を学びました。この接し方は、認知症の人に限らず、誰に対しても優しく接する基本だと思いました。また、認知症サポーターとしてできることは、「その人の世界に自ら入る」ということです。その人がなぜ困っているかを考え、相手が見ている世界を理解しようとする姿勢こそが、本当の優しさだと感じました。これからは、身近に認知症の方がいたら、焦らず穏やかに接し、その人の気持ちを尊重したいです。そして、その人の気持ちに寄り添えるような行動をしたいと思います。地域の中で認知症の方やその家族を支えられる存在になりたいと思いました。

今回の講義では、相手を思いやる姿勢の大切さを実感しました。認知症の人が道に迷っていたり、小銭を出しにくくしている動画を見ました。急がせたり怒ったりするのは良くない対応の仕方ですが、優しい口調や目線、声のトーンや態度なども意識しながら話すことで、認知症の方も笑顔で感謝していました。その動画を通して、認知症という脳の病気について知り、理解ある支えの大切さを感じました。そして、身近に認知症の方がいらしゃった時には声を掛け、助けようと思いました。また、認知症の方のできないところばかり見るのではなく、できるところを見てあげる大切さを知りました。行動や心理症状は、周囲の対応や環境で変化するので、できるところを見つけて褒めて安心させたり、環境を整えることで症状が改善していくことを知りました。認知症は誰もが起こりうる病気なので、今回の講義で学んだ対応の仕方に気をつけながら接していきたいと思いました。

私は本時の講義を受けて、認知症についての理解をより深めることができました。私は、今まで認知症の方に対して少し怖いイメージを持っていました。テレビなどに出てくる認知症の方は、怒っていたり、理不尽なことを言っている演技が多かったからです。ですが、講義を聞いていく中で、怒ったりするのは認知症の症状の1つであり、理不尽はことを言ってしまうのは私たちの接し方の問題でもあり、本人の中では理不尽ではないことなど、それぞれの行動の背景を知ることができたとともに、認知症の方々に助けたいと強く思うことができました。認知症になった方々は、自分の中でも違和感や責任を感じていたり、生きづらさを痛感している場合が多くあると聞き、私はとても苦しい気持ちになりました。元々はできていたことができなくなってしまい、周りの人が介入しすぎると本人の自尊心や自信も傷ついてしまうため、本当に助けが必要なおきにだけ手助けをする優しさが必要なのだと強く感じました。また、このような優しさは、認知症の方々だけでなく、今の人間関係にも通ずるものがあると思いました。私もそのような人間になれるよう今から気をつけていこうと思います。

◎ 11月4日(火)

「今日から使える心理学

～心理学を学んで「コミュニケーション上手」になろう!～

担当:甲南女子大学 心理学部

木場 律志先生

◇コミュニケーションと「ころ」

◇コミュニケーションの三要素

◇「心理学」って何?

≪講義の様子≫



≪生徒の感想≫

今回の講義を通して、私は「相手の気持ちに寄り添うこと」の大切さを改めて考えることができました。コミュニケーションは言葉だけで成り立つものではなく、表情やしぐさ、声のトーンなどの非言語的な部分が大きな役割を担っていることを学びました。普段の会話の中で、相手の言葉だけに注目するのではなく、相手はその言葉にどのような気持ちを感じているのかを感じ取ろうとする姿勢が必要だと感じました。相手を理解しようとすることは、急にできるものではなく、日頃の向き合い方が積み重なって生まれるものだと実感しました。相手の言葉を待つ、気持ちを決めつけない、表情やしぐさなどから感情を理解しようとするなど、今の生活の中で意識できることは多いと感じました。私は将来、看護師として患者さんと関わりたいです。病院では不安や痛みでうまく言葉にできない人も多いと思います。だからこそ「ただ聞く」のではなく、表情やしぐさなど言葉以外の情報にも注意して、その人のペースで気持ちを表せるように寄り添いたいのです。そのために、コミュニケーションの意識を少しずつ積み重ねていくことが重要だと学びました。

私は今回の講義を通して、心理学とは人の心を解き明かすだけでなく、「人との関わり方」をより良くするために役立つ学問であることを学びました。特に印象に残ったのは、コミュニケーションは単に言葉のやり取りだけでなく、表情や声の調子、身振りなどの非言語的な要素が大きな割合を占めているということです。これまで私は、話の内容や言葉の選び方ばかりに意識を向けていました。しかし実際には、態度や表情の方が相手に与える印象を大きく左右することに気づきました。また、心理学では人の行動や心の働きを「科学的に理解する」という点も興味深く感じました。私は人の感情や思考は曖昧で測れないものだと思っていましたが、心理学を通して分析することで、より良い人間関係づくりや自己理解につながるという話を聞き、日常の中での応用の広さに驚きました。今回の講座を通して、心理学は人を理解するための学問であり、思いやりを持って関わるための技術が詰まっていると感じました。今後は相手の立場になって考える姿勢を大切にしながら、自分のコミュニケーション方法を見直していきます。

今回は心理学について講義していただき、コミュニケーションとはなにかを、実際に体験して考えることで学ぶことができました。これまでコミュニケーションは、相手と会話することだと思っていました。ですが、コミュニケーションは必ずしも会話をするに限らないと知りました。コミュニケーションは、2人以上居合わせた場合に必ず生じるもので、情報が行き来している状態のことです。講義の中で、隣の席の人に嬉しかったことを話す実習では、反応してくれている時と、してくれない時で自分がどう感じるかを体験しました。反応してくれている時は、とても楽しくたくさん話が弾みましたが、反応がなくなった瞬間、話を聞いてくれていると分かりながらも、独り言を言っているような寂しい気持ちで、終わってからも続きました。この体験からコミュニケーションの仕方を工夫すると、相手の心も非常に簡単に変わると分かりました。今回学んだコミュニケーションの取り方を活かし、人と関わっていきたいです。

◎ 11月11日(火)

「看護医療の仕事について」

担当: 森ノ宮医療大学 広報部

石塚 充弘先生

◇医療とは？

◇医療者のやりがい

◇医療者として大切なこと

≪ 講義の様子 ≫



≪ 生徒の感想 ≫

今回の講義を通して、医療の現場では「患部だけではなく、その人の全体をみる」という言葉が響きました。病気や怪我を治すことだけが医療ではなく、その人を知り、どのような思いを抱えているのかなど理解しようとするのが本当の医療だと知りました。そして、今の社会はAIが行う職業が増えてきていますが、患者の心に寄り添い、共感や安心を与えることは人間にしかできないと感じました。私は将来、助産師として女性や妊婦、その家族に寄り添えるような人になりたいと考えています。お産の現場でも相手を支えるだけでなく、信頼し合う関係を築くことが大切だと思いました。妊娠や出産は身体的にも精神的にも大きな影響を与えます。そこで妊婦の変化などを見極めて一人ひとりの背景や想いに寄り添い、共感して妊婦にとって欠かせない存在になりたいと改めて思いました。そのため、相手の立場に立って物事を考え、傾聴と共感のコミュニケーション力を身につけられるように努力を重ねていきたいです。

今回の講義では、医療の仕事について学びました。医療には「予防医療」「終末期医療」「全人的医療」の3つの分野があることを知りました。これまで私は、医療とは病気を治すことだけだと思っていましたが、病気を防ぐことや人生の最期を支えることも大切な医療の一部だと分かり、考え方が変わりました。また、今回の講義で印象に残ったことは、「医療の仕事は人の命や人生に深く関わるものであり、AIには任せられない。人間だからこそできる大切な仕事」ということです。医療者は、ただ知識と技術だけで治療を行うのではなく、患者さんやその家族の気持ちに寄り添い、支える存在であると思いました。そして、医療の現場では、人から感謝されたり信頼されたりすることが多く、ひとつのミスが許されない責任の大きい仕事です。医療者に求められるのは、知識や技術だけでなく、向上心や継続力があり、相手の立場に立って考える優しさや思いやりの心だと学びました。私は看護の道に進みたいと考えているので、この学びを通して人の役に立ち、誰かを支えられるような医療者になりたいと思いました。

今回の講義では、医療の仕事について学びました。医療では、予防医療、終末期医療、全人的医療といった患者さんの予防から体と心のケアまで様々な角度から治療を行い、人生を支えていることが分かりました。平均寿命が延びているため、健康寿命と平均寿命の差をより小さくするためにも医療の重要性が増しており、医療は人の生死に関わる仕事であるため、ミスは許されず高ストレスになることもあります。人から「信頼・感謝される」仕事として、大きく貢献しているのだと思いました。また、私は将来、看護職に就きたいと考えているため、「患者さんとの関わり方」の大切さをより理解することができました。患者さんに関わるうえで信頼関係を築き、相手の立場に立って物事を考えられる力が求められるため、私は常に患者さんの声に耳を傾け、ポジティブな言葉をかけつつ、患者さんの気持ちを考えながら「笑顔」になれる場を自らつくっていきたくと思いました。そのために、観察力や判断力、行動力を身につけ、将来、迅速に対応できる人になりたいです。看護師はチーム医療の要であり、医療の進化は止まりません。今回、医療のやりがいや難しさなど実際の現場を知ることができ、より学びを深めることができました。



◎ 11月25日(火)

「訪問介護・訪問看護ってどんな仕事？」

担当: ステップこはま24hケアステーション

廣木 聖子先生, 吉川 由紀先生, 長谷川 諭先生

- ◇ 訪問介護の仕事
- ◇ 利用者さんの一日・ヘルパーさんの一日
- ◇ 訪問看護の仕事
- ◇ 実際の利用者との関わり～やりがい？怒られたらどうする？～
- ◇ コミュニケーションについて

≪ 講義の様子 ≫



≪ 生徒の感想 ≫

今回、訪問介護・訪問看護について講義していただきました。在宅で生活する人を支えるために必要な知識と、実際に現場で求められる関わり方について学ぶことができました。訪問介護は、利用者さんの家にかがいが、決められた時間の中で身体介護や生活援助を行う仕事です。食事や入浴、買い物など、どれも生活に直結する支援であり、利用者さんが日常を安心して過ごせるためにとっても重要な役割を担っていると思いました。同じ介助内容でも利用者さんによって対応の仕方が違うので、相手の生活スタイルに合わせて関わりつつ、限られた時間で効率よく動き、その人に寄り添う姿勢を忘れないことが大切だと感じました。訪問看護は、医療的な支援が必要な方の家に行き、医療行為を行う仕事です。病院と違い、利用者さんの生活の場に入るので、専門的な知識だけでなく、観察力や判断力が求められる仕事だと思いました。授業の後半では、コミュニケーションの取り方についてみんなで考え、共有しました。声掛けの実習では、少しの工夫で相手の安心感や信頼関係が大きく変わると知り、寄り添うことが大切だと感じました。今後、相手の気持ちを理解する姿勢で関わっていきたいと思いました。

今回の講義を受けて、コミュニケーションの仕方について知ることができました。難聴の人がいたらどう接するかをグループで話し合いました。目線を合わせたり、あいづちをうったり、相手の言葉を繰り返すなどの工夫をすることで、良好な関係を築くことができると知りました。訪問看護では、利用者さんの情報をいろいろな職業の人と共有するため、コミュニケーションが大切です。また、私のなりたい保育士もコミュニケーションが大切なので、子どもたちとも親御さんたちとも相談しやすい関係を築けるように、コミュニケーションの仕方には気をつけようと改めて感じました。そして、ヘルパーさんは時間を大切にしていることを知りました。利用者さんは時間を気にしているため、ヘルパーさんが時間を守らなければ安心や信頼を得ることができません。将来、仕事をしていくうえで、時間を大切にしなければ信頼関係を築くことができないと思うので、自分も時間を大切に行動できる人になりたいです。

訪問介護では、ヘルパーさんが、決められた時間の中で利用者さんの望む身体介護や生活援助を行うことを学びました。利用者さんの生活や気持ちを尊重する姿勢を、とても大切にされていると感じました。また、一人の利用者さんを複数のヘルパーさんが支えることで、様々な気持ちを持つ利用者さんに柔軟に対応していることを理解しました。訪問看護については、看護師だけでなく、理学療法士や作業療法士といった多職種が協力しながら支えていることを学びました。「自宅で最期を迎えたい」という思いを支える役割もあることに訪問看護の重要性を感じました。利用者さんやその家族と思いを共有し、怒っている人にもその背景に寄り添って笑顔で関わることで、心を開いてもらえるという話を聞き、看護の奥深さを感じました。私は将来、看護師になりたいと考えています。訪問介護や訪問看護の仕事学ぶことで、利用者さん一人一人に寄り添い、その人らしい暮らしを支える看護の魅力を改めて感じました。今回の学びをこれからの進路選択や将来の看護師としての姿に生かしていきたいです。

◎ 12月2日(火)

「ディベートⅠ～導入～」

担当:本校教員

◇ディベートとは、ディベートの必要性・目的・ルール、心得、審判の心得、証拠資料に関する内容と扱い

◇NHK 高校講座 現代の国語 『マイクロディベートをやってみよう』を視聴

◇マイクロディベート:「義務教育段階でも留年制を採用すべきである。是か非か。」

「人生において学歴は大事である。是か非か。」

≪講義の様子≫



◎ 1月13日(火)

「ディベートⅡ～論理の構成・情報収集～」

担当:本校教員

◇ディベートのための準備:

各テーマについて情報収集し、班ごとに情報を分析する。資料をまとめ、作戦会議を行う。

◇テーマ

「救急車の利用を有料化すべきである」

「出生前診断を法的に禁止すべきである」

「私立高校の授業料を無償化すべきである」

「高等学校の部活動も地域移行すべきである」

≪授業の様子≫



◎ 1月27日(火)

「ディベートⅢ～実践～」

担当:本校教員

《ディベートの様子》



《生徒の感想》

私は今回のディベートで、事前の情報収集と本番での臨機応変に対応する力の重要性を学びました。私たちの前に3つのディベートが行われていたこともあって、クラスの雰囲気はすでに出来上がっており、その中で自分たちの主張をどう伝えるかが難しい点だと感じました。準備の段階では意見が主観的だと捉えられないよう、理由や背景を丁寧に説明することを意識しました。本番では、想定していた主張や質問が実際に出たことで、落ち着いて受け答えができたと思います。一方で、具体的な事例をもう少し交えることができれば、より分かりやすい発表になったのではないかと反省も残りました。また、他の班のディベートを聞くことで、視点が違う人同士の議論や伝え方の違いを見ることができ、多くの学びを得ることができました。今回の経験を通して、意見を述べるだけでなく、相手に伝わる形で表現する大切さを実感しました。この学びを今後の話し合いや発表の場でも活かしていきたいです。

今回のディベートを通して、私は表現力や論理的思考力、情報収集力を向上させることができました。情報収集では、相手の立場に立って、様々な視点から議題に取り組みました。私は、反駁の役割を担っていたため、相手がどのような視点から物事を考えるのかを予測したうえで、一つ一つ慎重に考えました。「出生前診断禁止」の否定側で行い、肯定側立論で話された「命の選別、差別、支援の不足」という3つの観点に着目しながら、診断の目的や命の尊さ、経済的、医療的支援などの収集した情報を1分以内に抑え、分かりやすく伝えられるように心掛けました。緊張していたこともあり、少し早口になってしまいましたが、相手の意見と照らし合わせながら、スムーズに自分の考えを説明できたと思います。また、グループでの話し合いでは、それぞれが集めた情報をもとに、分かりにくい用語を確認したり、互いに気づけなかった部分を共有しながら、ひとりひとりがしっかり時間内に収められるように意識しました。全体を通して声の大きさやスピード、アイコンタクトなどの表現力をしっかり身につけるとともに、資料の具体性と自分の考えを踏まえたうえで、共感性の高い立論をしていきたいです。資料を用いて説明したり、違う観点からの解決策を考えたりしているグループもあったので、今回行った4つのテーマのディベートを意味のあるものにしていきます。

今回、出生前診断というテーマが医療技術の是非にとどまらず、社会の命の価値をどのように考えているのかを深く問う問題であると感じました。議論を始める前は「産むかどうかは個人の選択」という考えに一定の説得力があるように思っていました。しかし、資料を読み、立論を組み立てていく中で、このテーマは否定側と肯定側で「産む人の立場」と「産まれる人の立場」のどちらを重視するかによって、考え方や結論が大きく変わる問題であると気づきました。特に、出生前診断で異常が認められた場合、多くが中絶しているという現状を知ったとき、「自由」の裏には社会的価値観が存在しているのでは、と考えました。さらに今回のディベートでは、相手がどのような意見を出してくるのかを予測し、それに対する反論を事前に準備することの重要性を学びました。相手の立場を理解した上で議論に臨むことで、自分たちの主張をより深めることができると感じました。次にディベートの機会があれば、この点をさらに意識して取り組みたいです。今回の経験を通して、ディベートだけでなく、日常の物事を考えることにも積極的に取り組もうと思いました。

◎ 2月3日(火)6限

「総合ヒューマン類型所属の強みを生かすために」

担当:本校キャリア支援部長

◇ 人と関わる職は、人間にしかできない能力が必要

・「傾聴力・共感力」と「対話力」 ・「身体性」と「分析力・現場対応力」 ・「問題提起力」

◇ 進学先・自己分析・受験対策

◇ 先輩からのメッセージ

《講義の様子》



《生徒の感想》

今回の講義を通して、医療職や福祉職、教育関係職、カウンセラーなど人と関わる仕事の大切さを学びました。特に印象に残ったのは、AIにはできない「相手の言葉の裏にある感情や葛藤をくみ取る力」が必要だという話で、人の気持ちを理解し、支えることができるのは人にしかできない役割だと感じました。また、ヒューマン基礎で学んでいることは面接でも強みになると知り、自分の経験をしっかり表現できるようにしたいです。これからは苦手科目を克服しながら進路実現に向けて努力していきたいです。

今回の講座を通して、大学受験において「学力」だけでなく、これまでの経験や学びをどのように活かすかが重要であると感じました。特に印象に残ったのは、自分が所属している総合ヒューマン類型での講義で学んだ内容を面接の場で話すことが評価につながるという点です。普段の授業や講座での学びは、将来を考えるための材料であると同時に、自分自身を表現する強みになるのだと気づきました。今後は、日々の学習を受験と結び付けて考え、自分の考えや成長を言葉で伝えられるように意識していきます。

医療職や福祉職には専門知識だけでなく、人としての温かさが必要であると改めて感じた。ヒューマン基礎の授業を通して、将来、目指したい看護師像をより具体的に考えられるようになった。また、一年から学んだヒューマン基礎の学びを振り返り、それを面接で自分の言葉として伝えられることが総合ヒューマン類型の強みであると学んだ。自己分析を通して、自分の経験を「悩み・行動・成長」の流れで伝えることが面接で評価されると理解した。

講義を受けて、自分のなりたい保育士像を明確にすることが大切だと実感しました。保育士像がなければ、働きたい場所も決まらず、行きたい大学も決まりません。ヒューマン類型で学んだ中で、自分のなりたい保育士像を見つけるべきだと考えました。そして、面接の際には、文章をすべて覚えるのではなく、箇条書きで書いておいて、その上で本番では自分の言葉で話すことが良いと聞きました。人前で話す緊張を忘れてしまうので、話す単語や内容を覚えると良いと知りました。面接の際には、先輩から教えてもらった方法を活かして取り組もうと思いました。

本時の講義を受けて、大学受験に向けて私は今以上に努力をすべきだと感じました。私の志望する専門学校は推薦であっても数I・Aや国語が受験科目で必要です。また、推薦が不合格であったとき、すぐに共通テストに向けて取り組めるようにするためにも、今から受験勉強を始めていきたいと思えます。また、先輩方のアドバイスであったように、1日の目標を目に見えるようにしたり、手帳を活用したりして、自分の努力が見えるようにすることで、モチベーションも上げていきたいです。

◎ 2月3日(火)7限

「1年間のまとめ」

担当:本校教員

《1年間の反省・感想・印象に残ったこと》

私がこの一年間で感じたことは、人とのコミュニケーションを学んだ1年になったということです。昨年度は、どのような職業が存在するのかを重点的に学んでいましたが、今年度は「その職業ではどのようなコミュニケーションが必要か」を深く考えました。手話や言葉が使えない赤ちゃん、認知症の方など、関わる人の能力によって、コミュニケーションの取り方も変わるのだと改めて思いました。この一年で学んだことを、これからの生活の様々な場面で活かしたいと思います。

1年間の学習を通して、自分自身と向き合う場面が増え、とても有意義な時間になったと思います。私は、講義を受ける中で希望する看護の分野はもちろん、看護と関わる分野についても詳しく知り、学ぶことができました。そのうえで、看護はどうあるべきか、どのような看護師が求められているのかを総合的に見て考えることができたと思います。将来、看護師になることができれば、ヒューマン基礎の授業で学んだことを決して忘れずに、誰よりも頼られる看護師になりたいです。

私はヒューマン類型で、それぞれの職業がどのように人に携わり、どんな社会貢献をしているのかを1年間を通して学ぶことができました。私が特に、印象に残っているのは、「子どものための看護について」という講義です。私は将来、乳児院看護師になりたいという夢があるため、制限された空間の中で病気と戦う子どもたちに柔軟に対応する看護師さんの「誠意」を学ぶことができました。また、「心はかかわりの中で発達する」という講義では、乳幼児は「見えると触れる世界」という限られた範囲で懸命に生きていくと知り、様々な角度から人間関係の構築がされているのだと気づくことができました。

1年間ヒューマン類型の授業を受け、人を理解することの難しさと重要性を学びました。看護、保育、医療事務、介護などすべてを通して、医療や福祉の仕事は治療や支援を行うだけでなく、ひとりひとりの生活背景や気持ちに寄り添う仕事であると感じました。ディベートや命に関わるテーマでは、支援する安易な考えを持つのではなく、多様な価値観を尊重する姿勢の大切さを考えさせられました。一方で、自分の意見にとらわれ、他の考えを十分に受け止められなかった点が反省点です。1年間を通して得た考えや視点を、今後の進路や人と関わる場面に生かしていきたいです。

《来年度に向けての意気込み》

私は来年度、自分が目指す職業のメリットとデメリットを理解しながら、自分の持つ能力をどう活かしていくかを考えたいと思います。一年生で得た広い視野と、二年生で得た臨機応変さとコミュニケーション能力は、必ず将来の私を支えてくれると思います。そのため、来年度では能力の使い方だけでなく、活かし方を考え、私が持つ強みを入試の面接などで分かりやすく説明できるようにしたいです。なので、面接練習前の自己分析には、特に力を入れて取り組みたいと思います。

3年生になると、受験勉強を本格的に始めていく時期になり、気が張りつめることも多くあると思います。そんな中でも将来の目標を忘れずに、一歩ずつ進んでいくことで、必ず目標に辿りつくと信じて、自分と向き合っていきたいです。また、3年生は高校生活最後の年でもあるので、1日1日を大切に学校行事はもちろん、友達との生活や関わりを大事にしていきたいです。そして、1年度には、みんなで笑顔で卒業できるようにしたいです。

来年度は受験生ということもあり、将来どのような看護師になりたいかの想像図を描いた上で、自分の進路と向き合っていきたいです。私は将来、子どもたちひとりひとりの様子の変化に素早く気づける観察力と迅速に対応できる判断力を身につけ、子どもたちに笑顔を与えられる存在になり、共に成長していける人になりたいと考えています。そのために、ヒューマン類型で学んだひとりひとりに合わせた寄り添い方を見つけ、どのような看護を必要としているのかという「相手との向き合い方」を理解し、継続的にコミュニケーションをとっていきたく思いました。

看護師は知識や技術だけでなく人の気持ちに寄り添うことが大切です。なりたい人物像を目指して、相手のことを考えて行動できるよう意識して生活します。自分の苦手分野にも積極的に取り組み、努力を重ね、納得のいく形で受験に臨めるように頑張りたいです。

◎ 2月10日(火)

「ヒューマン基礎で学んだこと」(発表)

担当:本校職員

- ◇ ヒューマン基礎で学んだこと、印象に残ったことを全員が発表(1人2分)
- ◇ 発表者以外は審査用紙に記入

《講義の様子》



《自分の発表について》

私は、将来の夢との関連性を意識し、ヒューマン類型で学んだことを、どのような人物像になりたいのかなどを含めながら発表しました。私は発表する際、話すスピードと聞き取りやすさを意識しました。自分の意思を周囲の人達に伝わりやすくするため、一つ一つ話すテーマを分けながら要点をゆっくりとはっきり話すよう心掛けました。ヒューマン類型で学んだ「対人関係の在り方」と将来の夢である乳児院看護師について、その職業が必要とする特性や、実際の講義や映像を通して気づいたこと、感じたことを重点に、相手の立場に立って物事を考えられるように工夫しました。

発表原稿を考えるときに、1年間のヒューマン基礎を振り返って、講義の貴重さが改めて分かりました。自分の将来につながるような講義や、他の分野の講義など、たくさんの知識を身につけることができよかったです。また、1年生の時の発表と比べて、原稿の全部を暗記するのではなく、話したい点を覚えたりと、去年の反省を活かして工夫することができました。緊張しましたが、自分の納得のいく発表ができたのでよかったです。

今回の発表を通して、自分の考えを人に伝えることの難しさを感じた。原稿は上手くまとめられたと思っていたが、実際に発表してみると緊張してしまい、思いを十分に表現できなかった。「防災は全員参加型である」という言葉に対する自分の気持ちを、もっと具体的に伝えられたのではないかと感じた。一方で、助産師と防災を関連づけて考えられたことは、自分にとって大きな学びとなった。そして、自分の中でまだ伸ばせる部分があると気づけたことも大きな収穫だった。この経験をこのような発表の機会に活かしていきたい。

《生徒の感想》

今回の発表を通して、自分の考え方の変化を改めて感じる事ができました。授業を受ける前と比べて、医療や看護だけでなく、保育や介護など、すべての繋がりや、それぞれの役割を広い視点で考えられるようになったと感じています。また、他の人の発表を聞くことで、同じ授業を受けても、印象に残った点や感じ方が違うことに気づき、とても刺激を受けました。反省としては、もう少し具体例を入れて話せば、より伝わりやすい発表になったと思います。今回の経験や新しい視点を今後の発表や進路実現に活かしていきたいです。

他の人の発表を聞いて、とても良い刺激を受けることができました。特に印象に残ったのは、多くの人が学んだ内容を自分が将来就きたい職業と結びつけて話していたことです。自分の目標と結びつけていることで、言葉にも自信や熱意が感じられ、聞いていてとても分かりやすかったです。私は今回の発表で、できなかったため、次は自分の進路とも関連づけながら、より深みのある発表をしたいと思います。

◎ 2月17日(火)6限

「面接指導」

担当:本校教員

◇「高校生のための面接対策 DVD」を視聴

3つのポイント、集団面接では、協調性、自主性、コミュニケーション能力

◇面接のための準備を行う。(自己 PR、長所・短所、学校生活で頑張ったこと、志望理由 等)

≪講義の様子≫



≪生徒の感想≫

面接対策の DVD を見て、身だしなみや挨拶、姿勢、話の内容など様々な角度から意識を向けることが大切だと思いました。話すときの構成として「結論→理由→意思→結論」の流れを考えた上で発言することが重要であり、その大学がどのような人材を必要としているのかなど相手の立場に立って考えることも大切だと気づきました。実際に面接で問われる質問を理解した上で、自分の長所とともに学校の特色にも目を向け、何事にも柔軟に対応していきたいです。そして、面接のための情報収集をしっかりし、幅広い知識を身につけていきます。

今回の講義では、面接について深く学ぶことができました。個人面接と集団面接があり、ともに注意点がたくさんありました。その中で集団面接では前の学生の発言をよく聴くことが大切だと学びました。自分が話すことだけを頭の中で考えることができたらいよいよと思っていましたが、他の学生の意見を聞いてどう思ったかを聞かれることもあるので、他の学生の話を聞くことも大切だと感じました。その他にも、発言と内容が似ていたら冷静に対応することや、後に入る人にも気を遣うなど、気をつける点がたくさんあるので面接練習を何回も繰り返し、面接の時の話し方や動作などを身につけたいです。

今回の授業では、面接のときに気をつけるべき点や、自分の長所・短所などについて改めて考えることができました。挨拶や姿勢などの態度は、普段から定着させていなければいけないだろうと感じたので、今のうちから意識していこうと思いました。また、自己 PR や長所・短所なども今から考えておいたり、自分が志望する大学について入念に調べたり今のうちから着々と準備を進めていきたいです。

面接対策の DVD を見て、面接のイメージをつかむことができました。特に印象に残っているのは「結論→理由→意思→結論」の文の構成だ。文の構成が分かりやすい程、考えや熱意がよく伝わると学んだ。このようなことは、日頃からの先生や友人との会話で意識すると面接の練習にもつながるため、学校生活など日常生活で今から意識していきたい。

今回の講座で感じたことは、「日々の過ごし方が、そのまま面接の完成度になる」ということです。今日、改めて学んだ面接のポイントは、どれも特別なことではありません。しかし、学校での挨拶や普段の授業の受け方によって、一つ一つの動作は細かい部分で違いを感じてしまいます。なので「面接練習の為に」というのではなく、普段から意識していく必要があると思いました。今日学んだことを踏まえて、これからの学校生活の送り方を見直したいと思います。